



e公民館

おうちこうみんかん

藍で栄えた町

上落合公民館

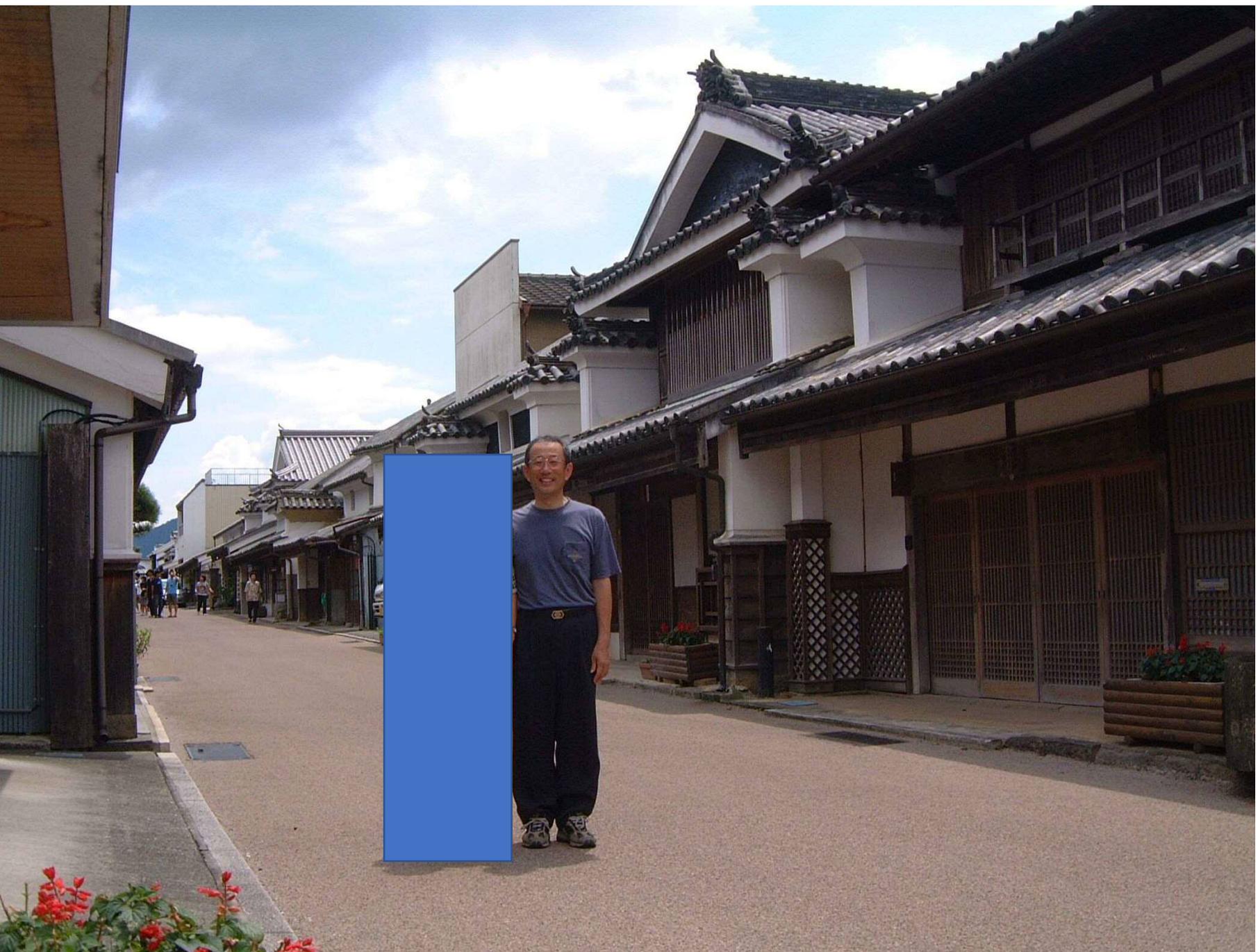
この度は、上落合公民館のe公民館をご覧いただきありがとうございます。

ここでは、日本の伝統色である藍色の「藍」についてご紹介します。日本文化の一端と言える、のれん、手ぬぐい、浴衣、風呂敷などの布製品の藍色は、アイと名の付く植物を原料に染められました。アイは、飛鳥く奈良時代に日本に伝わり、染の原料としてだけでなく、肌塗ったり、貼ったり、煎じて飲んだり、食べたりなど人々の暮らしに欠かせない大切な存在でした。

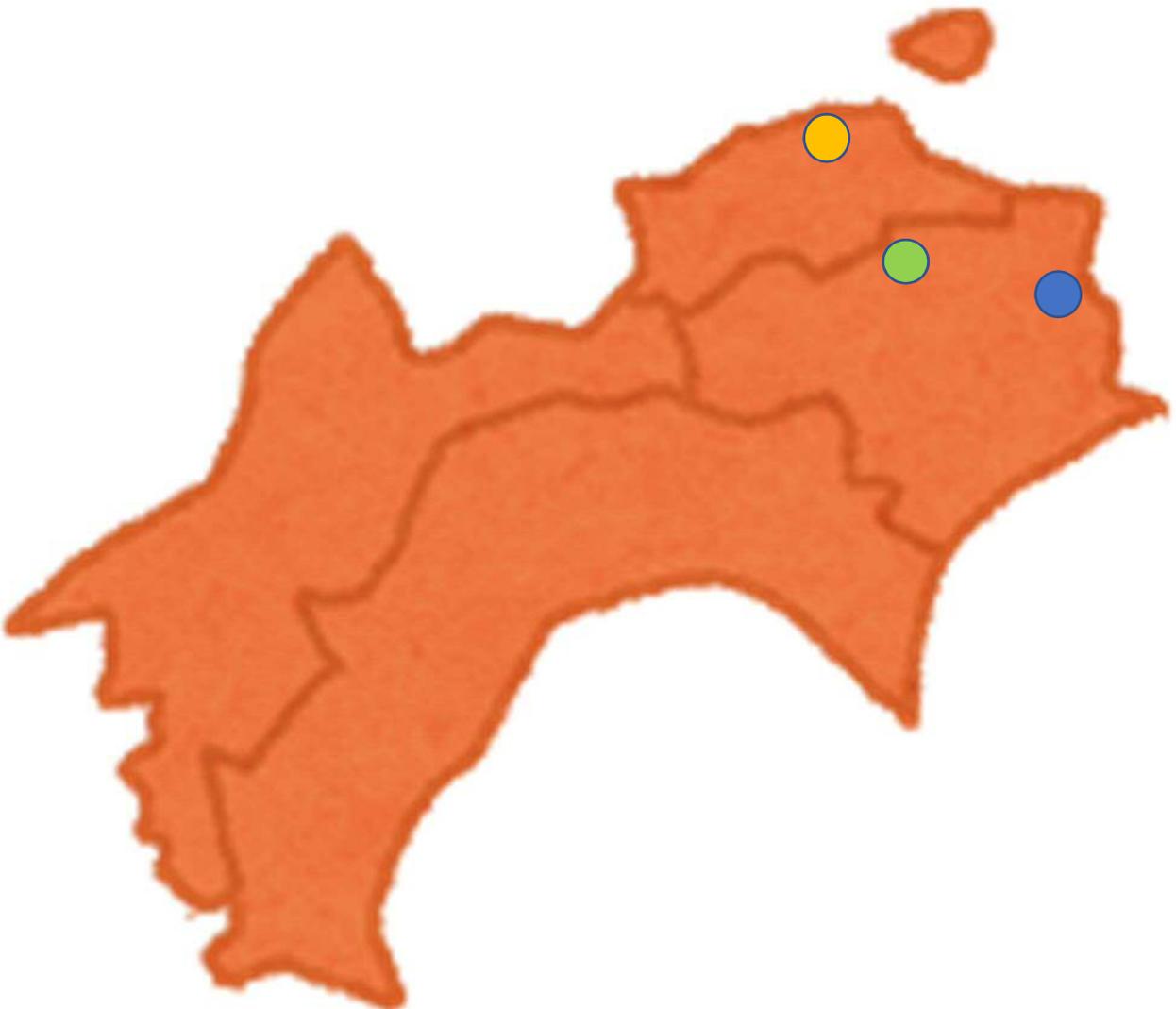
東京オリンピック・パラリンピックのエンブレムは、日本の伝統色である藍色で描いた組市松紋です。さいたま市内の公民館は、この藍色に注目し、藍に関する展示や講座を企画しました。そこで、今回は、上落合公民館が企画した展示の一部をご紹介します。

公益財団法人日本特産農産物協会が行った調査では、平成三十年産の藍の収穫量は、徳島県が国内の九十五パーセント以上を占めています。これは、蜂須賀家政（一九五八～一六三九）以降、藩が藍の保護・奨励策を取り、全国市場を支配した歴史の影響があると思われる。

様々に使われ、重宝された藍の全国市場を支配したのですから、富が集まり、栄えた町もできたことでしょう。



館長が立っているのは、脇町（徳島県美馬市）の「うだつの町並み」（重要伝統的建造物群保存地区）です。



- 脇町
- 徳島市
- 高松市

脇町は、吉野川北岸の主要街道の撫養街道と讃岐への街道が交差する交通の要衝にあり、さらには吉野川の舟運も利用でき、藍の集散地として発展した町です。

「阿波二十五万石、藍五十万石」という言葉があるなど徳島では藍の栽培が盛んだったので、藍の集散地であった脇町もさぞや発展し、人々も豊かになったことでしょう。

もともとは火事が燃え移るのを防ぐための防火壁であった「うだつ」も、江戸時代中期ごろになると装飾的な意味に重きが置かれ、自己の財力を誇示するための手段となったとのことですので、脇町の豊かさが想像されます。



赤い星のところが「うだつ」ですが、天井の梁と屋根の棟木の間にはたてられた柱も「うだつ」と言い、これが上から押さえつけられているように見えるというのが「うだつがあがらない」の語源として有力なようです。

素敵な町並みの中に藍製品を販売しているお店もあり、夏向きのしゃれたデザインのネクタイもあったのですが、ちよつどクールビズが始まった頃で購入しなかったのが今となっては悔やまれます。

集散地であったため旅籠もありました。旅籠の長男として
うまれたのが、将棋の十二世名人の小野五平さんです。生
家もありましたが、写真を撮っておかなかったのがやはり今
となつては悔やまれます。（埼玉県出身で、一昨年国民栄誉
賞受賞の羽生善治さんは、十九世名人になる予定です）



藍の人々の生活に与える大きさを知りました。